
最終兵器

此道 遊

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終兵器

【Nコード】

N2384F

【作者名】

此道 遊

【あらすじ】

パンヤのプレイヤーダイスケはある少女を助けるのだが…

俺は今まで直面した事無い事態にとっても困惑している。
いや、既に困惑というレベルなんて軽く突き抜けて迷惑の域である。
こんなものを貰ってどうするんだ？

俺がこんな事態になってしまったのには少々事情がある。

つい数時間前の事だ、俺は女の子が海に落ちたのを偶然にも見かけ助けた。

気を失っていたけど、俺の介護ですぐに気を取り戻し落ち着いてくれた。

え？俺が介護の柄じゃない？冗談を、これでも前職は警官なんだぜ。善良な市民を助けるのは俺の役目ってとこだ。

おっと、少し話が脱線したようだな。

俺が助けたのは、髪の毛がまるで動物の耳みたいにパタパタ動く不思議な女の子だった。

「ようやく気が付いたようだな、大丈夫か？」

「うんっ！助けてくれてありがとう、おじさんっ！」

「おいおい、おじさんはないだろう。それでもダイスケって名前があるんだから」

「うーん…じゃありがとう、ダイスケおじさん！」

「たーかーらー、その「おじさん」は余計だつて」

「だって、あたしから見たらおじさんじゃないの？」少女はきょとんとした表情で答えた。

たしかに、もう40も超えているしおじさんと呼ばれて仕方が無いのだが…複雑な気分だ。

「あ…そうそう、ダイスケおじさんってパンヤのプレイヤーのダイスケおじさん？」

「…そうだが？」

「やっぱり、そうなんだー。あたしはケンのキャディの口口って
いの」

「ほう、なら俺の次の対戦相手のキャディさんか」

「そうみたいですネー……あ、助けてくれたお礼にいいものあげる」と言いながら溺れた時でも大事に手に持っていた紙袋を俺に渡してくれた。

「これは何だい？」

「これを着たら絶対に勝てるっ！という衣装セットなの」

「ほう、そんなものが有るのか？」少々訝しげに俺は問いただした。

「うんっ」口口はと答えた、ニッコリ笑みを浮かべながら…

そんなこんなで今なのだが……

その衣装セットが「鏡音レンなりきりセット」なるものであった。

40過ぎの俺に10歳ソコソコの子供が着る衣装を着るといのか？
激しい葛藤が俺を襲う…

えーい、ままよ！！

「遅いなーおっさん」

「そうなんだプー、いつもは時間には正確なのに珍しいんだプー」

「多分なやんでると思うなー」

「**何で悩んで…**」

「遅れて済まなかったな……さあ始めようか」

⌈
⋮
⌋

⌈
⋮
⌋

⌈
⋮
⌋

一瞬以上に長い静寂の後：

「アーはっはっ――――、くっくるしー、あ
はははははは――――」

「ど……どんなふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう——」

対戦相手のケンと俺のキャディーのダンプーは、地面を叩きながら

笑い出してしまった。

…で、結局対戦は俺の圧勝となった。

ケン俺の格好を見るたび笑い転げてまともに打つことが出来ず、スコアがボロボロだったからだ。

最も俺のキャディのダンプーも全く役には立たなかったが…

そんな中でも口口だけはニツコリ笑っていた…

…ようやく彼女の言った意味が分かった

この日から、この衣装が俺の「最終兵器」となった。

（後書き）

自身が参加しているSNSとブログに掲載していた作品です。
鏡音レンの衣装が実装されたときに思いついた1作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2384f/>

最終兵器

2010年12月13日17時51分発行